

## 提言126 日本の若者の読解力が危ない

令和元（2019）年12月3日、経済協力機構（OECD）が平成30（2018）年に実施した国際的な学力調査の結果について公表した。前回の平成27（2015）年調査の結果と比較して、今回の学力検査で問題として浮き彫りになったのが日本の若者の読解力の低下である。

読売新聞は、令和元年12月4日の朝刊の第1面のトップで、「日本、読解力急落15位、過去最低」の見出しで報道した。

「数学的応用力」は6位、「科学的応用力」は5位と、上位を維持したとされているが、「数学的応用力」は527点で5位から6位へと、「科学的応用力」は529点で2位から5位へと順位を下げており、問題がないと言うわけではないが、「読解力」が前回調査より12点低い504点、前回調査の8位から今回は15位へと大きく順位が急落している。このことに注目が集まるのもまた当然、というべき事柄なのである。

「読解力」の順位低下の要因について、文部科学省（以下、文科省）は「子供の言語環境がSNSなどによる短文のやりとりの増加で、長文を読み書きする機会が減少したことが一因」、「読書などで長文に触れる機会が減った」ことなどを急落の理由として挙げている。

「今後、この結果を詳細に検証し、対策を検討する」これが文科省の当面の対応である。この問題に対する考えを述べる。

### 1. 日本人の活字離れの原因、その問題点を考える。

令和元（2019）年12月5日の読売新聞朝刊の第1面に、「文章作れぬ若者」というタイトルが踊っていた。この背景として、日本人全体に読書離れが進んでいるとの指摘がなされていた。その中で特に顕著なのが若者の読書離れであるとの指摘である。

一昔前、通勤時間帯の電車の中は、新聞、特に経済情報を提供している新聞をむさぼるように読んでいる人、大きく広げられないため筒状にして回して読んでいる人など、あるいは単行本の活字を一生懸命に目で追いかけている人などであふれかえっているという状況が見られた。

しかし、いまは電車に乗り込むやいなや、小走りに空席を目指して他人を押し分けて移動し、座るや否やスマートフォンなど情報を提供する機器を手にする人たちがほとんどである。本を開き、活字を目で追う人は少数か、皆無といった状況である。若者においては皆無と言ってもいい状況となっている。

若者がスマホなどに夢中になる背景として、情報が瞬時にして手元に届く、この便利さが受けているということがある。

何故、スマートフォンなのか、その活用されるいくつかの例を挙げてみる。

- ① 新聞記事が画面で見られて便利（新聞を開く、畳むなどの煩わしさが無い）
- ② パソコンも使えて便利
- ③ ナビが使えて便利

- ④ 料理本を見なくても便利
- ⑤ 写真が直ぐに撮れて便利
- ⑥ カレンダーがいつでも見られて予定表作りに便利
- ⑦ 映画などが見放題で便利
- ⑧ 留守番しているペットの見守りができて便利
- ⑨ 旅行雑誌にもなるので便利

等々、欲しい情報が瞬時に手に入れることができるという便利さ、これが多くの人々の共感を得て、広がりを見せたといえる。

しかし、この結果、失われることになったのが、自ら考え判断して行動するために、書かれた情報を理解し、利用し、熟考する能力、すなわち読解力の低下であるということになる。

令和元（2019）年の1月から3月にかけて、国立病院機構久里浜医療センター（神奈川県）が、厚生労働省事業の一環として行った「若者のゲーム依存に関する全国実態調査」、10歳から29歳までの5,096人のアンケート回答者のうち、直近の1年間にゲームを行った4,438人に対して、そのときの状況について行った調査結果が公表されている。

平日のゲーム時間で「6時間以上ゲームをする」と回答したのは、男子3.7%、女子1.6%であった。このうちの2割以上の人々が「学業に悪影響が出た、仕事を失った、それでもゲームを続けた」、また「勉強や仕事、友人との付き合い、家族との行事よりゲームが大切」と答えている。

1時間以上ゲームをすると答えているのは、男子30.4%、女子23.1%、1時間未満が男子26.0%、女子57.1%、2時間以上が男子18.9%、女子9.3%、3時間以上が男子12.3%、女子4.9%、4時間以上が男子8.6%、女子3.9%となっている。

「スマートフォンの普及でオンラインゲームにのめり込む若者が増え、日常生活への悪影響が出ている」と指摘する声も多い。

## 2. 学習到達度調査（PISA）の結果と文部科学省の見解

平成15（2003）年7月に実施された前回の生徒の学習到達度調査（PISA）の結果を受けて、文科省はこの調査に対する見解を「読書力向上プログラム」と題する論述にまとめ公表している。

この中で、「PISA調査は読解の知識や技能を実生活の様々な面で直面する課題において、どの程度活用できるかを評価することを目的としており、これは現行学習指導要領がねらいとしている『生きる力』『確かな学力』と同じ方向にある。」との見解を示していた。

また、学習指導要領国語では、「言語の教育としての立場を重視し、特に文学的な文章の詳細な読解に偏りがちであった指導の在り方を改め、自分の考えをもち、論理的に意見を述べる力、目的や場面に応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読み取る能力や読書に親しむ能力を育てることが重視されており、これらはPISA型「読解力」に相通じるものがある。」と示されている。

今回の平成30(2018)年に実施された調査で、日本の「読解力が15位に急落したことに対して、文科省は「SNS などによる短文のやりとりの増加で、長文を読み書きする機会が減った結果」と分析している。PISAの結果公表から数ヶ月、時間との関

係でまだ文科省の対応策は出ていないが、早く示されることを期待したいところである。

### 3. 文章を作れぬ若者の増加、その背景にあるのは

「この公園には滑り台をする。」このような主語、述語が不明確で、意味が通じない文章、「またか」と嘆く予備校講師、令和元（2019）年12月5日の新聞で紹介されている。

400字の原稿用紙、書き出しの1マスは空欄であるが、論述の途中での改行なし、最後まで1文のまま、論述の意図が不明という論述に出会うこともある。

スマートフォンを使っての友人たちとの短文のやりとり、いわゆるLINEの交換では、単語、略語といった気軽な「話し言葉」で お互いの意思を確認することができる。「正しく書かなくともいい」「意味が通じれば」という環境が身近に存在しており、ここでの会話が優先する、これが現実なのである。

平成30（2018）年、総務省が行った中高生ら（13～19歳）のスマートフォン保有率調査によると、中高生らのスマートフォン保有率は83.8%、10代のLINEの利用率は88.7%と大きく伸びているという。

また、SNSを通じて、ぱっと書いて、ぱっと送るといった習慣が身に付いてしまったため、推敲して文章の質を高めるという努力をしなくなった、このため、書けない、読めない人が増えたという指摘もある。

### 4. 理解力を育む取組、実践とは

文章を読む、その力を身に付ける。そのためには豊富な読書体験が欠かせないといわれている。「いままで読んだ本の中で一番結末がわかりやすかった」「登場人物の性格とセリフが一致していなかった」など、他の作品と比較しながら、読書感想文をまとめる。さらに「読んで面白かった」の段階から、同一作者の他の作品と比較してどうであったかなど、別の視点からの読書感想文の書き方を考えさせるなどの取組も大切である。

読解力で読み取るものは文章だけでなく、画像や映像、会話、表情、雰囲気も含まれる。読解力は、人が生きていく上でどうしても必要な力であるといえることができる。

子どもたちの読解力を高める方法として、一般的に考えられているのが「語彙力」「要約力」「思考力」の3つである。

埼玉県立大宮高校、3年生の国語の授業、大学入試センター試験の問題として出題された小池昌代さんの「石を愛でる人」を取り上げての授業、前回までの授業では作品の結末を隠して読み、生徒が結末を創作することに取り組んだ。本時の授業では班ごとに自分たちが作った結末などについて発表し討論する、といった授業であった。担当の教諭は「小説の味わい方、楽しみ方を伝えたかった」と、授業のねらいを話している。

静岡県沼津市の加藤学園暁秀高校2年生の授業は、江戸時代の劇作家、近松門左衛門の「冥土の飛脚」を題材にした授業であった。登場人物のもつ価値観、時代背景、作者の意図などを分析しながら批評しあったという。論じる際には、文章に基づく根拠を求め、論理に飛躍があれば、「何故そう思うのか」と互いに問い質す。論理的に考える。多角的に分析するという習慣が身に付いた。ニュースを見たときも背景を考えるようになった。生徒の感想である。

「家庭や学校で小説や新聞など、幅広く活字を読まなければ、日本人の国語力は上がらないのではないか」立命館アジア太平洋大学出口治明学長は語っている。

## 5、読解力の向上、このために取り組む事柄は

読解力の低下、このことが起こった要因についてはいろいろな指摘がある。横浜国立大学名誉教授（国語教育）高木展郎氏は「今回の低下の原因は、問題がデジタル時代に対応した内容に変わったこと、このことへの取組に日本の子供たちが慣れていなかったことに原因あり」と指摘している。

新しい課題への取組、このことへの問題提起と受け止めることができる。また、「日本の学校ではICT（情報通信技術）機器を十分に活用しておらず、操作に慣れていない、このことにも原因ありとの指摘もなされている。

現在、小中高等学校の授業では、児童・生徒がまとまった分量の文章を書く機会が少なく、ワークシートの問題の空欄を埋める、このような活動が多いのが実情である。知識偏重の暗記型の入試が多いことが影響しているという。

「正解は一つだけではない」「人と考えが違っていてもいい」と思えることができるように学習環境を整える、書くという活動を重視する、このような環境づくりに努めることが大切である。教員にとっては手間のかかる取組であるが、期待したい。

実生活に即した思考力、判断力、表現力の育成を重視した学習指導要領が小学校、中学校、高等学校で順次実施されることになる。学校が変わる、この意識改革を進める、浸透させる、この努力がいま求められている。

福井県坂井市がこの地の丸岡町にゆかりの徳川家康の忠臣である本多作左衛門重信が、陣中から妻に送った短い手紙、「一筆啓上 火の用心、お仙泣かすな、馬肥やせ」にちなんで行われている日本一短い手紙のコンクール、「筆啓上賞」、令和元（2019）年度も3万通を超える応募があったという。

今年のテーマは「先生」。

「校長先生」へ 「僕のこと知っていますか 全体の中の一人です  
いつか見つけてください」 （13歳 愛知県知多市）

「いけうち先生」へ 「じゅぎょうちゅう わたしのちいさなこえを  
みみをすまして きいてくれて ありがとう」 （7さい 福井県坂井市）

大学入試センター試験が令和元年度で終了、来年度から大学入学共通テストに切り替わる。思考力を問う出題が増えるという。小中高等学校で順次実施される学習指導要領、実生活に即した思考力、判断力、表現力の育成が重視されているという。学校が変わることが重要と言われている。この意識改革に学校が取り組むことが重要と考える。

## 参考文献

文部科学省 「読解力向上プログラム」 平成17（2005）

12月

文部科学省 「読解力の向上に向けた対応策について」

文部科学省 「PISA調査における読解力の定義、特徴等」

日本教育新聞 「子どもたちの文章理解が大ピンチ。どうすれば読解力が高められるか」

令和元(2019)年

7月

YomiDr(読売新聞) 「勉強・仕事・家族よりゲーム大切…平日に3時間、10~20台の20%」

令和元(2019)年

11月

福井県坂井市 「日本一短い手紙コンクール」

読売新聞 (令和元年11月28日 12月04、05、06、12日) の記事